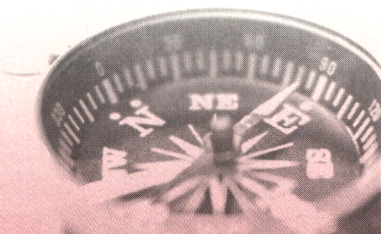


「おむつ減らし」の視点



白井正夫 ジャーナリスト

このよらの いつかあけなむ
このよらの あけはなれなば
をみなきて ばりをあらはむ
こひまろび あかしかねけり
ながきこのよを

越後地藏堂の貞心尼のもとに、良寛のお命も心もとなし、と使いが来たのは天保元年(1830年)の師走も残り少ない日だった。書状の最後に良寛の歌「このよらの……」の写しが添えられていた。ばり(ふん尿)をたれ流し、いつかあけなむ(いつか明ける)夜が明けたなら、をみな(女中)が始末に来てくれるのを、眠れないまま待つ、という歌である。

老師と心通わせていた貞心尼は雪の峠を越えて出雲崎の庵に駆けつけ、翌年正月5日、74歳で亡くなる良寛の最期を看取った。良寛が貞心尼から受けた介護・看護については、病者の苦悩、人間の苦悩を歌ったこの作品とともに多くの研究がある。

おむつ大国の姿に 介護の質、問いかけ

その1つ、市川信夫さん(上越保健医療福祉専門学校校長)の著書

『蓮の愛～良寛と貞心尼』(恒文社、2000年)は、貞心尼の生涯を描きながら良寛の死を克明に描いて、興味深い。

良寛の病氣は資料から「直腸がんの可能性が高い」と推測されている。日に何回もの下痢に苦しむ姿は歌のとおりである。死の数日前には、おかゆを食べることもできないのに、立ち上がりよるめきながら部屋の隅にある御虎子(おまる)に向かう場面がある。下の始末をする貞心尼に「お下の世話などされるのもおつらい事でございましょう」と、市川さんは語らせている。

歌と良寛の終末を知り、私がまず思ったのは「本人の意思があれば、人間はぎりぎりまでトイレに立てるのではないか」ということだった。病人には酷な言い方かもしれない。良寛がおむつをしていたかどうか定かでないが、寒夜、ふん尿で汚れていたのが、よろよろと御虎子に立ち向かう場面が強烈だった。

最近「おむつに頼らない」介護をめざす市民活動が活発になっている。10月初めには東京で「オムツ減らし市民委員会設立記念シン

ポジウム」も開かれた。おむつを使っている要介護者は多いが、本当に必要なおむつなのか、という問いかけである。おしっこ、排便のあり方は人間の尊厳、日常生活にかかわる問題で、不要おむつを減らして介護の質を高めようという呼びかけである。

22億枚。2001年、日本で生産された大人用紙おむつの量である。日本衛生材料工業連合会によると、約40社から600種類の製品が出荷され、生産量は10年間で5倍に増えた。一方、高齢の排尿障害者は全国に400万人。蓄尿、排尿など排せつ機能が働かなくなった身体的原因のほか、障害や痙攣ほう症による運動機能や判断力の低下でトイレに行けない人も含まれている。2つの数字から「おむつ大国日本」の姿が浮かぶ。

3割近い不要使用 高齢者の心身縛る

こうしたなか、愛知県は「寝たきりゼロ作戦」の一環で県をあげておむつ減らし運動を進めている。「高齢者排尿管理マニュアル」を作成して、おむつ減らしに大きな効果をあげている。

県はまず、99年に介護施設、在宅の要介護者1万6000人を対象に「高齢者の排尿管理実態調査」を行い、おむつ使用の実態を明らかにした。その結果、おむつ使用の割合は特別養護老人ホームで55%、老人保健施設59%、在宅訪問看護56%。半数以上がおむつ使用で、他に尿道カテーテル留置、清潔間欠導尿使用がわずかだがあった。この割合は全国的な傾向とみていいだろう。

さらに泌尿器科医がおむつ使用者のうち老人福祉施設入所者

1664 人を対象に訪問、聞き取り調査を行った。その結果は、「おむつ外しがおそらく可能」25%、「不可能」59%、「わからない」11%。尿道カテーテルでは「外し可能」17%、「治療により可能」22%だった。

調査結果からは、適切な対応・治療を行えば3割の人たちがおむつを外せるとしている。それだけ高齢者が不要なおむつをさせられていたことになる。なかには「もらすといけないから」「度々おもらしたから」というだけの理由も少なくなかった。おむつ使用は介護負担や看護労働軽減などのメリットはあるが、それが介護・看護する側の都合だけなら、高齢者は多くのデメリットを背負うことになる。

調査報告書は「安易なおむつ」の問題点を次のように指摘をしている。

精神的打撃・意欲低下・運動制限・専門医受診の機会喪失を招くことで、寝たきり状態誘発・QOL低下・治療必要な尿路疾患の見逃しにつながる。「おむつを着ける」ということは自尊心が傷つく精神的ダメージに加えて、外出や運動がおっくうになり、結果として寝たきり状態を生み出す肉体的ダメージも大きい。

なぜ、安易な装着が起こるのかについて、報告書は「介護・看護側も排尿管理についての理解が足りない」「現場の介護・看護者と一般医、専門医との連携が不十分」なことを挙げている。その背景には、排せつの身体機能が落ちたら「まず、おむつ」という漫然とした意識がある。



イラスト●西澤勇司

排尿管理で外せる 愛知県方式に評価

調査、分析をもとに愛知県が名古屋大医学部の協力で作ったのが「高齢者排尿管理マニュアル」である。介護者、看護者、医師向けに「おむつ外し」の具体策を示したもので、県内の高齢者介護、保健施設に配布された。

マニュアルはまず個人の排尿パターンを把握するために「排尿日誌」を記入し、排尿状態を評価、診断することから始まる。排尿の時刻、場所(トイレ、おむつ)、量、残尿などを24時間観察していく。失禁も「くしゃみをしたら漏れた」「だらだらと漏れた」「トイレに間に合わず漏れた」と詳しく記入する。

この記録で個人ごとの排尿障害状況がわかり、必要な治療と対策が可能になる。予測排尿時刻にトイレへの誘導ができ、障害によってはポータブル便器の活用、トイレに近い所への居室替えなどの手も打てる。

このマニュアルは県内25施設の利用者254人に実際に試された。その結果、41人(16%)が「尿

失禁がなくなり、おむつを外す」著しい効果があり、64人(25%)は「尿失禁の回数、量が減り、自分で尿をする」ようになった。4割の人の排せつの悩みが改善されたのだ。

県の取り組みを取り上げた朝日新聞社説(02年8月22日付け)が、調査協力施設の1つで、在宅の寝たきり者を受け入れる春日井市の特養ホーム「春緑苑」を次のように紹介している。「日中はベッドから起こし、トイレへ付き添う。オムツがとれると、表情が豊かになり、言葉が増え、クラブ活動にも積極的に参加するようになった」。

一読して「不要おむつ」が高齢者の気持ちをどれだけ縛ってきたかがよくわる。そしておむつの使われ方を考えれば、高齢者をベッドや車いすに縛ってきた身体拘束にまでつながる不条理に突き当たる。「おむつに頼らない介護」は高齢者の人権尊重運動である。死期迫る良寛がなお御虎子に向かいふらつく姿に、強い意思を持つ人間の不思議な力を思った。

白井正夫(しらい まさお)
元朝日新聞編集委員